

衛生上の問題を回避して、有意義な飼育活動を持つために

全国学校飼育動物研究会事務局長 中川 美穂子

飼育の原則：交流できる飼育

きれいな動物を、綺麗に飼って、常識的な接触をする

～病気のない動物を、良く掃除をしている所で飼い、くわえたりしないで飼う～

- 掃除が直ぐに終わって、たっぷりふれあえる楽しい飼育
- 動物の健康に注意して、触る時、動物に汚れを付けないように自分の手に注意して、触って遊んだ後にも手洗を洗う
- 特に、水の中で生活する動物を口に入れたり、その水を飲まないこと

基本的な注意

動物の選定

病気のない世話のより簡単な種類を選ぶ。齧歯類は実験動物業者から入手。野生動物と輸入動物を飼わない。衛生上と馴化と法的な問題がある。愛情の交流ができるチャボとウサギ、モルモット、ゴールデンハムスター等がおすすめ。

飼育の場所

子どものより身近で飼うと、より影響が大きい。校舎内が効果抜群！

飼育する数

数を決めて増やさない。3クラスある学年なら3匹に止めても、十分効果はある。頭数が多いと、糞尿が多くなり掃除が大変で、不潔になる。

飼育舎に入れる前

健康チェックと必要な処置の後、2週間別飼いで健康を確かめてから飼育舎に。新しい動物をケージ飼いのまま飼育舎に入れ、先住動物と網越しに生活させて、お互いに気にしなくなったら一緒にさせる。

子どもへの触れ合わせかた

獣医師から手ほどきを受ける。子どもに、動物の気持ちを代弁するように話かける。動物が安心する抱き方で、子どもに抱かせる。

日常の管理

自分で掃除することも、餌をとることもできない動物の気持ちを考えさせて

毎日飼育舎掃除

居室が広すぎると掃除が大変。なるべく土から離して、巣箱を入れる。学校の実情・事情の中でも、獣医師の助言で少しでも工夫を！

動物の体力維持

朝夕2度、糞尿、食べ残しを掃除して餌と水を与える。人は日に3度食べていることを子どもに話して、思いやりと栄養摂取の大切さを伝える。

学校全体で気を配る

命は繊細で、条件が合わないとうちに死んでしまうこと、死ぬことは大変なことだと子どもに伝えるために、学校全体で飼育を支える。死ぬに任せない。

防寒、避暑を考える

健康を守るためには、暑さ寒さに気をつけることを伝える。夏は避暑を考え、冬は木製、あるいはダンボール箱をいれて防寒させる。

保護者を巻き込む

「命に休みはない」と子どもに伝えるために、休みは保護者と子どもの親子当番で担当してもらおう。親は、子どもの苦労が分かるし、良い親子の会話できたなどの感想を持つ。